

## 活躍中の同窓生

株式会社国際経済研究所  
副理事長

井戸 清人氏  
(S48 数)

# 「明るく、楽しく、 前向きに」

本校数学科から大蔵省（現財務省）へ入省という異色の経歴を持ち、現在(株)国際経済研究所副理事長を務める氏の柔和な笑顔からは、学生運動の嵐が吹き荒れるなかでの本校入学、アジア通貨危機という未曾有の困難に奔走した国際局審議官時代と、激動の時代に立ち向かった人の厳格さは伺えない。「人との出会いを大切にすると語る氏のネットワークは堅固だ。現在も経済のエキスパートとして活躍される氏の言葉から、我々は何を学べるだろうか。

インタビュー、写真撮影 2014.4.10 株式会社国際経済研究所にて

株式会社 国際経済研究所  
INSTITUTE FOR INTERNATIONAL ECONOMICS

### ●プロフィール

いど きよと

1950年生まれ。東京出身。1973年大蔵省（現財務省）入省。ドイツザールラント大学留学。国際局総務課長、駐米公使などを経て、2004年財務省国際局長。2006年日本銀行理事。2011年4月より(株)国際経済研究所副理事長。

### 半年間のロックアウト

— 東工大に入られたのは1969年なのですね。

**井戸** はい、当時は学生運動が最も激しかった時期で、東京大学の入試が中止になった年です。

— ちょうど私もこの頃です。1970年の修士卒業です。

**井戸** では当時まさに、いらしたわけですね。

— ええ。門にピケが張られていて、それをみんなで蹴破るような時代でした。そのころ東大の入試があれば、やはり東大を志望されていたのですか？

**井戸** 正直に言いますとね（笑）。数学や物理ではやはり東大の方が研究者の数も多かったと思います。

— では、どこを選ばれても理系であったことには変わらなかったわけですね。

**井戸** そうですね。大学一年の時の指導教官は機械工学の田村先生でしたが、結局半年間、学生運動

で学内に入らず、先生のご自宅へ伺い御指導頂いたこともありました。我々は「寺子屋授業」と呼んでいましたが懐かしい思い出です。

— そのころの先生は素晴らしいですね。先生が「我が家へ来い」と。

**井戸** ええ、有難いですね。東工大は非常に良かったと思います。

### 微分位相幾何学との出会い

— では、そんな中で目指されたものは何でしたか？

**井戸** はい。東京の大学の数学科学生グループのゼミに参加し微分位相幾何学に出会ったことから、数学科に進み微分位相幾何学を学びました。コボルディズム理論がテーマだったのですが、この理論で有名なルネ・トムが1972年に『構造安定性と形態生成』という本を著したことで、日本でも一躍カタストロフィ理論が広く知られるようになりましたね。



—— ここで急にコボルディズムとカタストロフィ理論。もう少し分かりやすくお願いできますか？

**井戸** そうですね、必ずしも正確ではないかも知れませんが、私なりの理解で説明すると、微分位相幾何学は滑らかな空間を研究しますが、微分幾何学のように長さや曲がり方を数値でとらえるのではなくより大きく特徴を捉えようとするものです。例えば、球は押し潰してラグビーボールのような形にすることは出来ても、穴を開けない限りドーナツ型にすることはできませんから、球・ラグビーボールとドーナツは何が違うかを考えるわけです。ですから微分位相幾何学とは、滑らかな図形を滑らかに変形しても変わらない指標によって、空間を分類する学問だと私は思います。

例えば球面は方程式で  $X^2+Y^2+Z^2=1$  のように定義されるわけですが、別の見方もあります。球の上から水をかけると、まず一番上で水が一斉に広がり、そして流れて球の一番下、南極のところでもた集まって下に落ちるわけです。ですから2箇所だけ、吹き出

しているところと吸い込まれているところがあり、これを特異点と言うのですが、そのような特徴を表すものを球と定義できるのか。また、球面を上から輪切りにしていくと、まず一番上にいきなり点が現れ、輪切りの円は徐々に大きくなり、その後また徐々に小さくなり最後にぱっと消えます。そのいきなり始まったところといきなり消えたところに2箇所だけ特別な点ができる。



ではそういうものを球面と定義したとき、方程式で表した球面と同じなのかという問題があります。

10年ほど前ですが、100年ぶりにポアンカレ予想\*が解決されました。

—— かなり難しい研究をされていたのですね。

## 「トポロジーは死んだ」— 人生の選択

**井戸** 前述のルネ・トムが「トポロジーは死んだ」と発言したこともあり、若手研究者の中には“今後何を研究して行くべきか”という不安を持った方もいました。私は最後まで大学院に進むつもりでいましたが、もともと経済にも関心があり、数学を専攻し経済企画庁に入った先輩から勧められたこともあって、大蔵省や経済企画庁にも話を聞きに行くことにしました。

当時の大蔵省は2年に1人程度理系の出身者を上級職(当時)の事務官として採用しており、理系も文系出身者と同じ扱いで、海外に留学する機会もありました。そして皆さんから話を聞くうちに研究職よりも行政官の方が自分の性格に合っているのではないかと思います。

—— なぜそう思われたのでしょうか？

**井戸** 数学の研究者というのは、かなり孤独な仕事だと思うのです。もちろん数学者仲間と議論もするのですが、基本的には、各自の専門分野をひとりで考え、論文を読んでという作業ですよ。私は人付き合いが苦手なところはありましたが、それにしてもこれはちょっと違うのかな、と。行政官のように2年くらいで次のポストに移り、新しい経験ができて多くの人と触れ合うことができる仕事というのも、面白いのではないかと思います。

—— なるほど。それで大蔵省に入られたわけですね。

## 最初で最後の地方経験 — しもだて 下館時代

—— 語学も相当勉強されたようですが、それは学生時代から？

**井戸** 正直なところ学生時代にはまだ(笑)。大蔵省に入り、最初は主税局で海外の租税制度の調査を担当しました。当時、政府の留学生はアメリカ、イギリス、ドイツ、フランスの4か国に行っていましたが、ドイツとフランスは、主税局の私がいたポストから行くことが多く、私もドイツのザールラント大学に2年間留学するため政府の試験を受けることになりまして、必

要に迫られ猛勉強した次第です。夜中にドイツ語の個人レッスンを受けに通ったこともありました。

—— では、奥様とはドイツでお知り合いに？

**井戸** いいえ、東京です。帰国後主計局で勤務した後、茨城県にある下館税務署に署長として赴任しましたが、その頃に結婚しました。

—— いきなり下館では、奥様は寂しい思いをされたのではないですか？

**井戸** たしかに当時は交通の便があまり良くなくて、東京に行くのも今ほど便利ではなかったので、最初はそうだったかもしれませんが(笑)。

下館での生活は1年でしたが、私は当時27歳、それまでの署長に比べると飛び抜けて若いということもあり、皆さんにととても温かく良くいただき、地方の良さをしみじみ感じました。私にとっては最初で最後の地方経験でしたから非常に印象深く、下館の方とは今もお付き合いがあります。

—— お若いころに税務署長というと、やはりご苦労もありましたか？

**井戸** 管内に4市6町2村あったのですが、当時は造り酒屋さんがたくさんありまして、どれも経営が大変でした。税務署長はそういう方々の相談に乗るのも仕事だったのですが、このお付き合いでは若干苦労しましたね。

—— 一緒にお酒を飲んだりされる？

**井戸** そうですね。実をいうと私は役所に入るまでお酒は一滴も飲めなかったのですが、「理系の学生は、みんな勉強が忙しくて酒なんか飲んでいる暇がないだろう」と言われて、「飲めない」とは言えないものですから(笑)。

—— なるほど。では下館を離れてからはどのようなお仕事をされていたのですか？



**井戸** その後は主に国際局でしたが、私が副財務官、国際局審議官だった1997年から99年にかけて、アジア通貨危機が起きました。

## 「We are on the same boat」

—— アジア通貨危機でご経験になったことを少しお話いただけますか？

**井戸** 当時アジアは経済成長が速く、インフレだったので金利は高くせざるを得ない一方、ドルペッグと言いますが、為替はドルに固定化されているので、為替リスクもなく安定した高い投資リターンが期待できるといことで、先進国から短期のドル資金がかなり入っていたわけです。そうした状況の中で、タイの経済に問題があるという見方が出たことがきっかけとなり、一斉にドル資金の引き上げが始まり、インドネシア、マレーシア、フィリピン、韓国、ベトナムなど他の東アジアの国々にも波及しました。

資金流失で外貨準備はなくなりますし、為替は暴落するという状況で、どうしようかということになったのですね。

—— その時に日本は相当資金を援助したわけですが、そのことは今も地元で評価されているのでしょうか？

**井戸** もちろんそう思います。それこそ日本も金融危機で、山一証券が破たんするなど大変な時代だったのですが、あの時は宮澤財務大臣が「We are on the same boat, われわれはアジアを助けなければいけない」と言われて、当時の300億ドル、3兆円の資金を東アジアの支援に準備しました。この時には私も毎週アジアの国々に出張し、各国の財務大臣や次官と協議をし、IMFや世界銀行と協力しながら解決に奔走しました。当時一緒に苦勞をした東アジアの官僚の中には、その後も長くお付き合いしている方が多くいます。

—— そういうお付き合いは、代々後輩など次世代へ引き継がれていくものですか？

**井戸** 次の世代は次の世代でのお付き合いがあると思いますよ。

私が国際局長の頃には、日本の財務省と韓国の財務省にはサッカーチームがありまして、日韓友好サッカーというので年に1回か2回は親善試合をしていました。

—— それは素晴らしいですね。

**井戸** ですから、最近の日中、日韓の状況は大変残念ですね。



## すべてが「日銀ネット」を通っている

—— その後は日銀でコンピュータシステムもご担当されたとか。

**井戸** はい。2006年に財務省国際局長を退任し、2010年まで日本銀行理事を務めました。コンピュータシステムは2年余り担当しました。

府中市にコンピュータセンターがあり、日本銀行と金融機関との間で資金や国債の決済をオンラインで処理するシステム「日銀ネット」の運行管理をしています。そこには千人以上のスタッフが常駐していました。

異なる銀行の間で振込みや送金をする時には、銀行間で決済が行われるわけですが、この銀行間の決済が、「日銀ネット」の中で行われます。

—— すべて「日銀ネット」を通っているのですか？

**井戸** はい。ですから万が一このシステムが止まると大変なことになってしまいますので、府中のセンター近くに常時泊り込んでいるスタッフが、早朝からシステムの立ち上げを始め、万全の体制を取っています。

—— 今はハッカーなど、いろいろとありますので大変だったと思いますが、他に何か日銀時代での良い思い出などございますか？

## 一朝一夕では作れない、強い信頼の上に築かれたネットワーク

**井戸** そうですね、日本銀行には素晴らしいエコノミストがたくさんいるのですが、彼らと様々な経済の議論をしたことが一番の思い出ですね。

現在はトヨタ自動車のシンクタンクである国際経済研究所の副理事長として、トヨタ自動車の幹部に国際経済、政治の動向について報告するのが主な仕事ですが、研究所以外でも金融政策やマクロ経済について話すことが多く、当時培った知識や人的ネットワークが非常に役に立っています。

—— ネットワークを築く上で、特に大切にすべきことは何だと思われますか？

**井戸** やはり相手の信頼を裏切ってはいけないということですね。

ネットワークを大きく広げることは大切ですが、本当にコアなネットワークというのは一朝一夕ではできません。何年もいろいろなお付き合いを経て、本当にお互いが信頼できる相手だと分かる。そうして築いたネットワークというのは非常に貴重で、大切にしなければいけないと思います。

—— 信頼関係があるかないか、最後はもうこれにつきますね。他のビジネスでも同じです。ではご趣味に関して少しお話し下さい。オペラがご趣味ですが、いつごろから始められたのですか？

**井戸** もう5年くらいになると思います。私が外務省に出向し、ワシントンの日本大使館で公使として勤務したときにお仕えた柳井俊二駐米大使から勧められました。大使は以前からオペラを歌う会に入っておられ、それで君も来ないかとお誘い頂いたのです。

実はカラオケなどは苦手と逃げ回っていたのですが、大使に誘われて入ってみるとやみつきになりました。



—— いきなりオペラというのはすごいですね。

**井戸** いえ、指導いただいている新井直樹先生が非常に良い先生ですから。

普通なら、まずは発声練習や練習曲などから入るのですが、新井先生は「あなたが歌いたい曲は何ですか」と言って最初から楽しく始められました。毎週イタリア・オペラのアリアを個人レッスンしていただき、年に1~2回は発表会を行っています。

最近では、紀尾井ホールやイタリア文化会館などで行いました。メンバーは男女合わせて20人弱でシニアな方が多く、一時は男性陣で私が最年少ということもありました。

—— ピアノを習っていたらそうなので、音楽の素地があったのですか。

**井戸** そうかもしれませんね。譜が読めるので、先生から「井戸さんは手が掛からなくていい」と言われました。日本のシニアな方々だと、譜が読めるという方はそんなに多くないようですね。

—— そうですよ。歌も、お酒が入らないと歌えない人が圧倒的に(笑)。では、スポーツの方は如何ですか？

**井戸** スポーツは残念ながら、冬に家族でスキーに行く程度です。運動不足なのは明らかですが、アリアを歌うことがかなり運動になっているのではないかと密かに期待している次第です。

## 「君が暗い顔をしたら部下が心配する」

—— 座右の銘、モットーなどはございますか？

**井戸** 特にありませんが、日ごろ心がけていることは「人との出会いを大切にする」ということと、「明るく楽しく前向きに」ということでしょうか。

—— 「人との出会いを大切にする」、これは先ほどお話いただいた点ですね。「明るく楽しく前向きに」こちらも素晴らしい。

**井戸** そうですか、そう言っていただければ嬉しいです。私自身はそれが一番大切なことだと思っていますので。

別に私が上司として特に立派とは思っていませんが、部下にとっては、上司がどのような気分にいるかということは結構大事だと思うのです。「明るく、楽しく、前向きに」していれば、部下は何でも正確にきちんと相談できる。

—— そうですね。正確にきちんと相談できるという

のが良いですね。「おい、いつでも相談しろよ」と言っても、誰も相談に行かないという(笑)。多いですね。**井戸** 昔、ある上司と、金融危機などで銀行が大変になるときに大臣室へ行って、私が暗い顔で出ようとする「大臣に会った後に暗い顔などするな。君が暗い顔をしたら部下がみんな心配するだろう」と言われました。私がお仕えた国際派の上司にはいつも「明るく、楽しく、前向きに」という方が多いと思います。

部下の数が増えるほど、彼らからいつでも報告やアイデアを出してもらうために「明るく、楽しく、前向きに」という姿勢が必要だと思います。

## 今の東工大に望むこと

—— では、今の東工大に望むことがあるとすれば何でしょうか。

**井戸** 第一にリベラルアーツ教育の一層の充実ですね。私が在籍した当時も人文系には著名な教授陣がおられましたが、今後も教授陣の充実を図ると共に、人文系の大学との交流等を行うことも一案だと思います。

第二は国際化です。語学教育の充実は当然のことですが、英語による授業を増やすことにより、海外への発信能力や留学生の増加にも役立つと思います。また、海外の大学や研究所との交流、例えば共同プロジェクトや単位の相互認定などを進めることも考えられると思います。

第三に経営もできる人材の育成です。「東京工業大学」という名前から一般的に、製造業での技術者育成というイメージを持つ人も多いのではないかと思います。技術者ばかりでなく、技術もわかり経営も出来る人の育成を目的としていることを明らかにすることで、そうしたイメージを変えることも大切かと思います。—— 東工大のMOTにイノベーションマネジメントというところがありますが、まさにそういうことに力を入れていて、現在「共創」をテーマに様々な業界の方が集まっています。

**井戸** 具体的には、MOTというのは何をなさっているのですか？

—— 私の場合、自分の経営体験や社会のトレンドを示し、皆さんそれを土台にして自分だったらこうしたいというような議論を展開してレポートを提出してもらい、その結果をフィードバックしたりしています。

**井戸** なるほど。同窓会も各企業や地域単位など各種ありますが、そこでもう少し現役の学生と経営のトップとがコミュニケーションできる場があった方がいいと思うので、MOTなどはまさにそういう意味では一番ふさわしい場なのではないでしょうか。さらに海外にもそうしたスキームが出来れば留学生支援や海外の研究所、大学との交流にも役立つと思います。

—— では最後に、学生諸君に一言お願い致します。

**井戸** 繰り返しになりますが、ぜひ他大学や先輩とのネットワークを広げられることを心から希望します。これは数学科にいて人付き合いが苦手だった私自身への反省でもあります。

また、財務省も日本銀行も理系のセンスや考え方を必要としており、以前より熱心に大学院卒も含めた理系出身者の採用をしています。最初から避けなくてぜひチャレンジしていただきたいと思います。

—— お忙しいなか、どうも有難うございました。



\*ポアンカレ予想:「単連結な3次元閉多様体は3次元球面 $S^3$ に同相である」という予想。「単連結」とは、その上のすべてのループ(輪)が1点に縮んでしまう図形。球面や円盤は単連結だが、ドーナツの表面は違う。1904年にフランスの数学者アンリ・ポアンカレによって提出され、以来ほぼ100年にわたり未解決だったが、2002年~2003年にかけてロシア人数学者ペレルマンによって証明された。

インタビューア： 関 誠夫(S43 生機 45 修)

文： 富山 千絵

写真撮影： 魚住 貴弘